ななかまど Nana Kamado Vol. 45

[北海道情報大学学内報] 2009年3月31日発行

春和景明

CONTENTS

02 平成20年度学位記授与式
02 建学の理念
03 日本語ITクラス第一期卒業
04 退任職員のあいさつ
06 高校大学連携協定調印
06 厚生労働省委託事業の講演会を開催
07 リコーコンテスト2008
08 ビジネスプレゼンテーションコンテスト
09 英語プレゼンテーションコンテスト
10 2008年度第1回図書館賞
11 図書館賞 最優秀賞作品
13 図書館賞 優秀賞作品
16 Xboxを使った英語教材の製作
17 i場所プロジェクト
18 国際会議研究発表
20 大学院修士課程取得おめでとう
22 海外研修報告
23 キャリアデザインⅡでOB講演
24 クラブ紹介
26 教育GPフォーラム報告
28 学生サポートセンターからのメッセージ
30 大学院生による学会発表
31 公開講座終了報告
32 主要行事・編集後記

発行:北海道情報大学
〒069-0832 江別市西野幌59-2 TEL.011-385-4411 FAX.011-384-0134

平成20年度 学位記授与式 挙行

総務課

3月13日(金)午前10時から、本学松尾記念館講堂において、平成20年度北海道情報大学学位記授与式が行われました。

経営情報学部第17回、情報メディア学部第5回、通信教育部第12回、大学院第12回の合同で行われた式の模様は、会場に設置されたテレビカメラ4台により、全国の各教育センターにも中継されました。

式は、厳粛なうちにも和やかな雰囲気のなか行われました。その後、卒業記念写真撮影、学科等別学位記授与、体育館での卒業祝賀会と続き、学位記を手にした卒業生・修了生たちは、大学との別れを惜しんでいました。

卒業生

・経営情報学部

経営ネットワーク学科	52名
情報学科・システム情報学科	84名

・情報メディア学部

情報メディア学科	140名

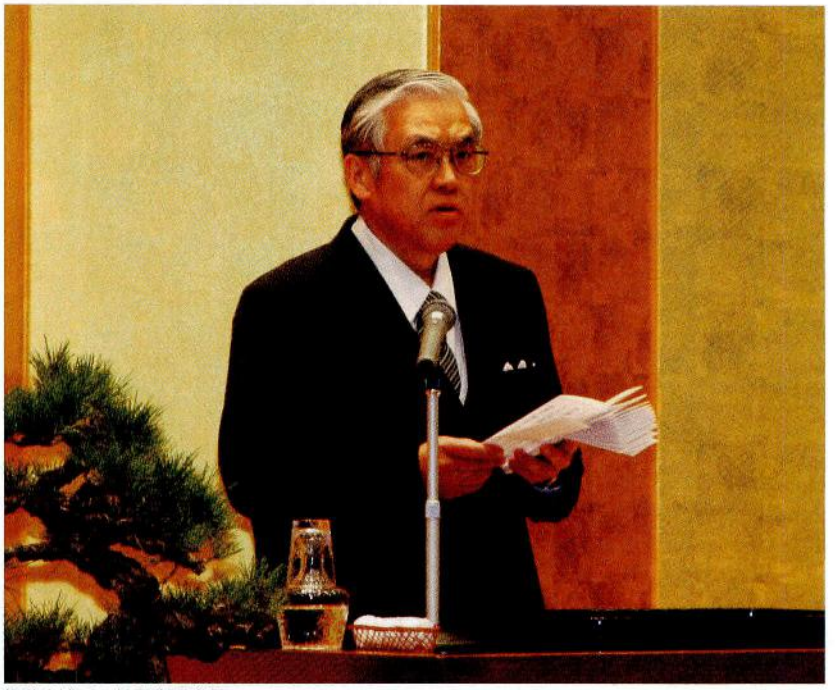
・経営情報学部　通信教育部

経営学科・経営ネットワーク学科	71名
情報学科・システム情報学科	329名

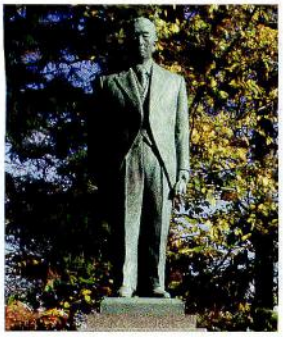
修了生

経営情報学研究科	14名

学位記を授与する嘉数学長



祝辞を述べる松尾泰理事長



建学の理念

IT社会の豊かな未来を創る有為な人材育成を使命として。

北海道情報大学は、我が国の情報化社会の黎明期に情報教育の新しい扉を拓いた、学園創立者松尾三郎博士によって、平成元年に「情報化社会の新しい大学と学問の創造」を建学の理念として開学した大学であります。

本学は産学協同の精神の下、豊かな国際性、創造力ある人間性を涵養し、実学に裏付けられた実践的な専門教育を通して我が国の国際情報通信社会の進展に貢献する高度情報通信技術者を育成することを使命としております。

IT日本語クラス第一期生卒業

── 夢に向かって第一歩 ──

学生サポートセンター事務室

平成21年3月13日（金）、南京大学からの留学生として情報メディア学部に在籍していたIT日本語クラス第一期生の11名が卒業しました。

大学院への進学、中国のIT企業に就職、日本のIT企業に就職など、それぞれの進路に向って卒業して行きました。

彼らは、2年前に本学と南京大学外国語学院との共同プロジェクトとしてスタートした、初めての留学生でした。不安や戸惑い、挫折感などを体験しながらも無事、卒業することができました。

唯一人、日本のIT企業に就職した張邱揚（チョウ・キュウヨ）君は、在学中には本学の「よさこいソーラン祭り」チームの日本人学生と一緒に、メンバーの1人として活躍していました。

誰よりも積極的に日本人とのコミュニケーションをとり、日本に馴染む努力をしていました。20年間育ってきた中国の親元を離れ、食べ物、気候、言葉、風習など、異なる環境や文化の日本で過ごした2年間の留学経験を活かして、それぞれの夢の実現に向かって、羽ばたいてほしいと思います。

学位記

中国
張 邱揚
昭和60年9月30日生

本学情報メディア学部情報メディア学科所定の課程を修めて本学を卒業したことを認め学士（情報メディア学）の学位を授与する

平成21年3月13日

北海道情報大学長
嘉数 侑昇

北海道情報大学で学んだこと

情報メディア学部特任教授　井野 智

本学では主に“造形基礎・画像工学論・設計支援情報システム論・メディア基礎（図形）・総合演習”などを担当しました。建築構造学専攻の私にはほとんどが専門外の分野で講義準備に苦労しましたが、CGやCADなどコンピュータによる図形処理の基礎を学ぶことができ、たいへん勉強になりました。

医療情報学科を除く3学科（通信教育部を含む）で開講した“造形基礎”の授業には、とくに熱心に取り組みました。授業の柱を、造形イメージを可視化する知識と技術を学ぶ図学と、美しさを科学する構成学とにおき、実際の造形として様々な分野の作品を取り上げました。2001年の研修旅行“イベリア半島における歴史的建築と街並み保存に関する調査”では、ガウディーの新奇な建築と造形、ピカソ、ミロ、ゴヤの絵画、オペラ、フラメンコ、ファド鑑賞にも足を運びました。

「会員相互の協力によって建築に関する技術・学術・芸術の進歩発達を図る」これは私の所属学会の一つ建築学会の定款の文言です。大学卒業以来約50年になりますが、最初の7年間は建設会社で技術を、つづく33年間は北大で学術を生業とし、最後の本学における9年間は芸術（の基礎）に携わることができました。文字どおり有り難いことです。

一時、オムニバス形式の授業“現代技術史”も分担させていただき、建築・土木技術史を体系的に学ぶことができました。また、地域づくり・人づくりがテーマの“大学放送講座”や“ふるさと江別塾”の講師を委嘱され、町づくり、環境問題といった今日的課題にも目を向けることができました。

時間的にも精神的にも少し余裕ができたことから、本学着任後は様々なボランティア活動の役職を引き受けました。専門を生かした調停委員・専門委員は別として、地域づくり・人づくりといった専門外の公開講座の講師を務めたのも、ロータリークラブ会長として取り組んだ“森づくり運動”、全日本大学準硬式野球連盟副会長としての組織運営や学生指導の経験があったからだと思います。

役職といえば、本学でも図書館長、情報メディア学部長、学長をお引き受けしました。

道内大学図書館長会議の当番校となり急遽設けられた初代図書館長、急逝した三本木先生の後釜を務めることとなった情報メディア学部長、週5コマの授業を兼担しながらの学長職は能力の限界で中途降板、一度も任期を全うできず、理事長はじめ多くの関係者の期待を裏切る結果となり申し訳なく思っています。

幸い健康に恵まれ、授業やゼミの指導は最後までなんとか責任を果たすことができホットしています。多様な学生を相手に、多くが満足する授業をすることの難しさは承知しながらも、履修者全員の名前を覚え、毎回、授業時間の半分近くを演習にあて個々の能力に応じたきめ細かな指導を行うなど、及ぶ限りの努力はしたつもりです。ほとんどが図形に関する授業ですので、定規、コンパスを用いての黒板への作図はとくに入念に行いました。手作図は作図の手順を教える最良の方法です。大きな製図道具を自在に操る年寄りの職人技は、間違いなく、学生を授業に集中させる効果を発揮したと自負しています。以前、私の黒板の図を見たある芸術系の教授と教育学の専門家から「消すのが惜しい」とのお言葉を頂戴したことがあります。この二言は、年々体力と気力が劣化し教育への情熱を失いがちだった私を励ます大きな力となりました。

私のような高齢者にも惜しみなく充実した活動の機会を与えてくれた本学は、自由で、人間味溢れる素晴らしい大学です。

どうぞ皆さん、北海道情報大学の学生、卒業生、教職員であることに誇りをもち、これからも元気でご活躍ください。「やる気と元気を失うと人間はおしまい」教室で言い続けた言葉です。これからは自分自身に言い聞かせ、回りに迷惑をかけぬよう毎日を大切に過ごしたいと思っています。

退任教員 ■retirement

ごあいさつ

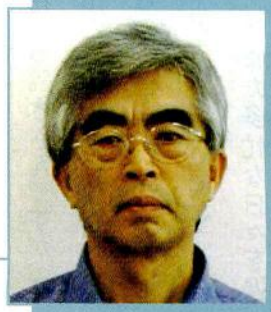
退職にあたって

経営情報学部 教授　外山 清高

大学設立準備室を含めると20年以上、何人かの方にはさらに前の学園に戻って、本当に多くの方にお世話になりました。教員のみなさま、ありがとうございました。職員のみなさま、ありがとうございました。そして、多分そのつもりではなかったでしょうが、多くの刺激を与えてくれた学生諸君にありがとう。

内外ともに激変期のように思われますが、情報大を外から静かに見守っていたいと思います。みなさまのご活躍をお祈りいたします。

ほんとうにありがとうございました。



退職のあいさつ

情報メディア学部教授　山口 忠

お蔭様で8年間大禍なく過ごせました。その間の楽しかったことを2、3記して挨拶に代えます。

はじめの4年程は、講義として、確率統計、情報数学基礎を受け持ちました。前者は内容としては何方がやっても代わり映えしないが、後者は、論理、離散数学を取り上げ、自分なりにデザインして、楽しく出来ました。この情報数学基礎は後に、メディア基礎(数理)という科目に変わり、内容も画像、音声の基礎になるものになりました。オイラーの公式という数学の中でも最も美しい公式のひとつへ向かって、数列、級数、三角関数の級数表現など自給自足を心がけ、教える方が楽しみました。受講生には迷惑だったかもしれないが反省しても後の祭りです。この公式は小川洋子著「博士の愛した公式」でも取り上げられ、映画化もされたので記憶している人もいると思います。

ゼミ関係では、統計解析、色と形、人口、犯罪問題、女性の社会進出など等学生が自分で選んだ幅広いテーマで私自身が勉強させてもらいました。

教室の外に目をやれば、この大学は自然に囲まれていることが実感できます。学生も自然に沿って生活している面もあるとみえ、「自然がいっぱいですね。今日は雨降りで欠席が多いですね」などと嫌味も出ました。私自身も昼休みなどに、構内の散歩や隣接する自然林の散策を楽しみました。その際のスケッチ：大学の四季をご笑覧ください。

最後に、刺激を与えてくれた学生、いろいろお教え頂いた教職員の皆様にお礼申し上げ、本学の一層の発展を願って退職の挨拶とします。

北海道釧路明輝高等学校 高大連携協定調印式

このたび、北海道釧路明輝（めいき）高等学校と高大連携の協定を結ぶこととなり、平成21年2月6日（金）午前11時から、本学において調印が行われました。

この高大連携は、北海道釧路明輝高校の生徒が、本学の情報系科目をeラーニングで履修し、その履修科目を高校と大学の双方で単位の認定を行う「単位互換」を目的としたものです。

eラーニングでの高大連携は、昨年12月に調印を行った東京都立東村山高等学校に続いて、2件目となるものです。

講演会「地域資源を生かしたコンテンツ産業の可能性」を開催

2009年2月1日、厚生労働省委託江別市地域雇用創造推進事業「地域資源を活かしたコンテンツ産業の可能性～仕事で楽しむアグレッシブ女子座談会～」が本学講堂にて開催されました。

最初に演台に立ったのは、MCミューズ所属のフリーアナウンサー鈴木舞さん。今ではFM局でパーソナリティーを務める鈴木さんですが、江別市内での勤務経験もあり、自らの大学時代のエピソードやアナウンサーになったきっかけ、また多忙な日々を過ごしながらも「えべチュン飼育係」で4コママンガを描いていることなどをアナウンサーらしく軽快に学生さんへ語りかけました。

シンソフィア所属のゲームプランナー倉兼千晶さんは本学情報メディア学部卒業生。任天堂から発売されている人気ソフト「わがままファッションガールズモード」のクレジットに名を連ねる倉兼さんがゲームプランナーになる夢をかなえるまでの話を中心に、ゲーム業界を目指す学生さんへ心構えなどのアドバイスをし、多いにエールを送っていました。

最後に登壇したアイティメディア所属のジャーナリスト岡田有花さんは、IT系ニュースサイト「ITmediaNEWS」の記者さんで、ネット上ではちょっとした有名人。自身の名前を「ググってみた」ところから話を始め、自分を含めたネット上でのキャラクターが、どのようにコミュニティに受け入れられ成長していくのかをテンポよく説明しました。

講演会後、本学講師の棚橋先生をコーディネータとして登壇者3名で地域資源を生かしたコンテンツ産業の可能性についてパネル討論を行いました。ネット環境の発達により地域格差はなくなったはずなのに、地方ではなかなかコンテンツ産業が盛り上がらない理由などを、腐女子トーク(?)も交えながら議論、会場を大いに沸かせていました。

実社会の第一線で活躍する女性の意見を聞けるまたとない機会として、会場には一般市民の方にも足を運んでいただき、成功裏に開催することができました。本学では、このような講演会への開催協力を今後も積極的に行っていく予定です。

RICOH & Sun Java™ Platform Programming Contest 2008で入賞

システム情報学科
准教授　棚橋 二朗

コンテストの参加者での集合写真

昨年12月12日に本戦の行われた、株式会社リコー主催「RICOH & Sun Java™ Platform Programming Contest 2008」にて、本学参加チームが「グランプリ」と、3位相当の「リコー賞」を受賞しました。

本コンテストは、リコー社の複合機（液晶パネルによるユーザインタフェースを持ち、プリンタ・スキャナ・Fax機能を併せ持った業務用コピー機）向けプログラムをJavaで記述するための「RICOH Operius Platform SDK Type-J」を用いて作成し、その独創性、ユニーク性、実用性、コーディングスキル、プレゼン力によって競うもので、本学からは3チーム、全国から8大学11チームがエントリーし、10月初めに行われた第1次選考で5大学8チームが東京で行われる本戦へ出場決定、本学は3チーム全てが一次選考を突破しました。

組込みシステム開発では、PC上でコーディングを行い、エミュレータでデバッグし、その後に実機でのテストを行うというクロスプラットフォーム環境での開発が基本となります。一次審査に通過した本学はリコー様より2台の実機（imagio MP C-4500、一台約250万円）をお借りし、最終選考に向けて連日深夜まで開発を行いました。

東京銀座のリコー本社で行われた本戦では、各チーム15分間のプレゼンテーション及び実機デモを行い、その後の参加チーム交流会にて、電気通信大・津田塾大と共に大会委員長より記念盾を授与されました。

グランプリ受賞の棚橋Jゼミチーム

グランプリを受賞した棚橋Jゼミチーム「えべチュン飼育係システム班」の「ヘルチューン」は、Jゼミ「Wiiリモコン特論」の延長として、任天堂から発売されているゲームコントローラ「Wiiバランスボード」を複合機のユーザインタフェースとして用い、職場で気軽に健康管理ができるシステムで見事栄冠に輝きました。大学院生チームらしくコードも洗練されたもので、審査員全員より高い評価を得ました。

リコー賞を受賞した谷川ゼミチーム「Mr.Biezzie」の「めいしよみとりくん」は、複合機付属のスキャナによって名刺を読み取り、OCRで取り出したテキスト情報を基に分類しデータベースへ格納するシステムで、特に取得したテキストデータから自動的に社名や名前のフィールド判断を行う仕組みが評価されました。

惜しくも入賞は逃しましたが、棚橋ゼミチーム「8jtLab」の「MailPrint」は、携帯電話で撮影した写真をメールで送信するだけで、複合機が自動製本しアルバム印刷を行うシステムで健闘しました。

リコー賞受賞の谷川ゼミチーム

このような大学間で競うプログラムコンテストへの公式参加は本学初めてのケースで、しかも輝かしい成績を学生が上げたことは喜ばしい限りです。このコンテストは2009年度も開催予定、ディフェンディングチャンピオンとして恥じない作品を提出できるよう、今大会で受賞したメンバーも、さらに研鑽を積んで欲しいと願っています。

コンテストの詳細は、http://www.ricoh.co.jp/javacontest/をご覧下さい。

第5回 ビジネスプレゼンテーションコンテスト

先端経営学科 教授 中村 忠之

今年度で第5回を迎えたビジネスプレゼンテーションコンテストは昨年の11月21日に応募を締め切り、1次審査通過者による発表審査会を12月10日、表彰式を今年の1月22日に学長室で行い無事終了できました。

今回の新しい取り組みとして事前にビジネスモデルとは何かの説明や前回の優秀作品の内容紹介、さらには外部講師によるプレゼンテーションのやり方についての講習会を先生方の協力により行いました。その効果もあったのかもしれませんが応募数はビジネスプラン部門で15件、ビジネスアイデア部門で12件の合計27件という今までにない多くの応募がありました。また、内容的にも前回の作品よりも充実していて、特にビジネスプラン部門ではビジネスプランにふさわしい内容構成の作品が目立ちました。

プレゼンテーションのやり方も年々進歩の跡が見られ、このようなコンテストを続けることが重要と考えています。

ビジネスにおけるアイデアやプラン、さらにプレゼンテーションは社会に出てから常に求められるものです。特に、自分でビジネスを起業してみたいという学生諸君のチャレンジの場としてもぜひ次回も積極的に参加してほしいと思います。

なお、発表審査会の模様は12月11日付の北海道新聞（江別版）でも取り上げられました。

各部門の受賞者 -prize winner-

ビジネスプラン部門

最優秀賞
「RiRaCo」
経営ネットワーク学科3年　市川 未来

優秀賞
「箸の包み紙のアフィリエイト」
経営ネットワーク学科4年　赤田 大輔／鈴木 裕

奨励賞
「Fishe」
経営ネットワーク学科3年　川村 一棟

ビジネスアイデア部門

アイデア賞
「Kowake」
経営ネットワーク学科3年　池畠 明日美

アイデア奨励賞
「ドールを集めている人に」
経営ネットワーク学科3年　澤口 かなえ

「人を生かす、イカスまちづくり」
経営ネットワーク学科3年　長井 隆一

第1回 英語プレゼンテーションコンテスト

システム情報学科　ソーラ サイモン
医療情報学科　田中 洋也

本学教養課程英語グループでは、今年度より、総合的な英語コミュニケーション能力の伸長を図ることを目的とした英語授業での学習成果を公開するために英語プレゼンテーションコンテストを行うこととした。コンテストは、マイクロソフトパワーポイントを用いたパワーポイントプレゼンテーション部門と英語によるスキットでの脚本、演技を競う英語劇部門の2部門により構成された。10月より12月末まで応募を受け付け、パワーポイント部門では9作品、英語劇部門は英語Ⅳ受講生による27作品を審査した。1月27日には学生プラザで表彰式を行い、その様子は北海道新聞江別版でも取り上げられた。

パワーポイントプレゼンテーション部門では、携帯電話会社の販売員からオペラ歌手へと転身した英国人のドキュメントを通し、夢を見る勇気を持つことの大切さを訴えた大学院生の何嵩昊君が最優秀賞を受賞した。また、英語劇部門では、童話「三匹の子ぶた」に大きなブタを加えユニークに脚本をアレンジ、メンバー全員による迫真の演技が印象的な情報メディア学科2Fクラスのグループ「The Three Little Pigs with Big Pig」が最優秀賞を受賞した。

次年度以降は、より多くの学生の参加が得られるよう実施形態、時期、方法について改善を加えていきたい。また、将来的には本学を中心として他の大学、高等学校などに門戸を拡げて本学教育の特徴として位置づけられるような事業に発展させられればと考えている。

各部門の受賞者 -prize winner-

パワーポイントプレゼンテーション部門

最優秀賞
「Light Your English On Fire!」
大学院経営情報学研究科　何 嵩昊（副賞 2万円）

優秀賞
「The Earth is in Danger」
情報メディア学部情報メディア学科　芹田 剛嗣（副賞 1万円）

「Twelve Zodiac Signs and a Cat - English Presentation」
情報メディア学部情報メディア学科　杉野 友哉（副賞 1万円）

英語劇部門

最優秀賞
「2F The Three Little Pigs with Big Pig」グループ
情報メディア学部情報メディア学科（副賞 2万円）

優秀賞
「2I Kasa Jizo 2008 Version」グループ
経営情報学部医療情報学科（副賞 1万円）

2008年度
第1回図書館賞の結果

平成20年度の図書館賞が実施され、本年1月20日に結果が発表されました。この図書館賞は、学生が読書に親しむことや、表現力を高めることを主な目的として、この度始めて実施されたものです。短い応募期間にもかかわらず、11編の応募があったことは、初回としては、予想以上の嬉しい結果となりました。

募集は、「論文」と「読書感想文」の2部門に分けて行ない、審査は両部門合わせて行ないました。

その結果、下記のとおりに受賞作品を決定しました。今回は第1回でもあり、スムーズにいかない点もありましたが、次回からは、さらに充実していきたいと考えております。

最後に審査にあたっては、図書委員の先生のほかに、梅津教授、平子教授の応援も頂きました。この場を借りて御礼申しあげます。尚、受賞作品のうち、最優秀賞1題、優秀賞3題につきましては、「学内報ななかまど」の紙面にて順次掲載させて頂くとともに、大学ホームページ上でもご紹介する予定です。

図書館賞2008選考結果

★最優秀賞

『西の魔女が死んだ』(梨木香歩)を読んで
情報メディア学部　情報メディア学科　長南　桂

★優秀賞

一、『職場ストレス問題』について
経営情報学部　経営ネットワーク学科　池畠　明日美

一、渡辺眞子『捨て犬を救う街』
経営情報学部　医療情報学科　那須　美穂

一、小川洋子『妊娠カレンダー』を読んで
経営情報学部　先端経営学科　藤井　由紀子

★佳作

一、『手紙』を読んで
情報メディア学部　情報メディア学科　谷上　綾菜

一、夏目漱石『こころ』を読んで
情報メディア学部　情報メディア学科　田口　薫

一、村山由佳『天使の梯子』を読んで
経営情報学部　経営ネットワーク学科　松本　智貴

一、『海辺のカフカ』
情報メディア学部　情報メディア学科　飯塚　岬

★奨励賞

一、大学生の近代史観
『日本は誇りを持てる祖国なのか、日本国は国民を守れるのか?』
情報メディア学部　情報メディア学科　吉田　周平

一、感覚で生きるとはどういうことか
情報メディア学部　情報メディア学科　中村　啓一

一、犯罪の心理について
経営情報学部　経営ネットワーク学科　佐々木　孝明

最優秀賞作品

『西の魔女が死んだ』（梨木香歩）を読んで

情報メディア学科　長南　桂

人がこの世に生まれたとき、将来について唯一確実に分かっていることは死ぬことである。魂と身体（からだ）が合体し、私たちはこの世に生を享けた。魂の本質は「成長」である。魂が成長するには身体で体験しなければならない。身体が体験することは楽しいことも辛いこともある。この作品では、中学校に入ってから学校に足が向かなくなった主人公の少女まいが、ひと月の間、都会にはないたくさんの自然の中でおばあちゃんと生活をする。その生活の中でおばあちゃんの生き方、考え方に触れ、自分ひとりでは解決することができなかった不安と苦悩、恐怖感や孤独感、自分と自分以外の人間との関わりを「魔女修行」という訓練をすることで徐々に理解し、受け止めながら自分を変えていく。そんな少女の姿が、その時の少女の心の葛藤と共に描かれていた。異国の雰囲気を漂わせたおばあちゃんの少し古風かつ自然に溶け込んだような生活の仕方や生活の知恵、草木や日の光りのキラキラした「生」を感じる描写、そして「死」に対する意識を暗く重たいイメージからさわやかな水色へ変化させるような描き方が印象的であった。

この小説の前半部分、主人公は自分にとって過酷である学校からおばあちゃんの家に避難し、現実から逃げ出したのだ、と私は主人公を責めた。しかし心の深いところでは、主人公の存在が私と重なっているようにも感じた。人間は自分の弱さを隠すために相手の欠点を探すものである。主人公を責めた私をはじめ、誰もが迷いや悩みを抱えて生きている。逃げ出したいと思うことは日常茶飯事である。その重さに押しつぶされそうになった私たちに、ヒントを与え、導いてくれたのがおばあちゃんの「魔女修行」であったと思う。

私はこの小説を読んだことによって、今までできるだけ気がつかないようにしてきた自分の閉鎖していた心が開き、新鮮な空気が通ったような気がする。母親や父親への期待に応えたいという気持ちと、その半面で自分の中にある劣等意識。また、自分の直感のようなものに固執してしまうところや、妙に人からの評価を気にしてしまうところ。これらに共感してしまうのは私だけだろうか。しかし共感しているだけでは「魂の成長」には繋がり得ない。「魂の成長」のためのおばあちゃんの「魔女修行」では、「悪魔を防ぐ」ことが重要とされた。「悪魔を防ぐ」には、意志の力、自分で決める力、自分で決めたことをやり遂げる力を強化しなければいけない。これは簡単なようでとても難しい。生きていく上で、自分で決めたことをやり遂げるという経験は大変重要なものであると思う。その中での失敗や挫折においてもまたその要素と言えるのだろう。しかし家庭や学校を始めとした現代の教育現場において、自分で決めることややり遂げたという達成感、発見とそれに対しての驚きなどを体験しないまま、なんとなく機会を逃してしまっている子どもが多いというのが実情ではないだろうか。この作品の中で「悪魔」と呼ばれているのは、学校で主人公をいじめた同級生たちではない。主人公や同級生たち、また私たち人間の心の中に潜む「弱さ」ではないかと私は思う。「弱さ」を克服するための「魔女修行」は積極性や自律性を養い、他人への想像力と広い視野を持って自分の知らない世界を受け入れる訓練であるといえると思う。これは毎日繰り返される私たちの日常生活を、もう少し元気に過ごせるようなきっかけと気付きを与えてくれたように感じる。

この作品において、私の心に強く印象づけられた言葉がある。それは「自分が楽に生きられる場所を求めたからといって、後ろめたく思う必要はありませんよ。」というおばあちゃんの主人公への言葉である。それは最初に学校からおばあちゃんの家に避難した主人公に対して私が感じた印象を受けてのおばあちゃんの答えのように感じた。そして、「シロクマが北極で生きることを選んだから

といって、誰がシロクマを責めますか。」とおばちゃんの言葉は続く。そうか、と私は納得した。自分が楽に生きられる場所ということは、決して怠けたり他人に依存したりして生きるということではない。自分を発揮し、魂を成長させることができるような場所のことなのだ。自分を向上させるためにその場所を探すことは、逃げるということとはまったく違う、意志をもった自分の決定であると感じた。意志の力は、物事に対して闇雲にそれを継続させるということではないと考えさせられ、私の中の「意志の力」に対しての意識は大きく変わったように思う。

「生きる力を育てる」ことを描いたこの作品では、おばあちゃんが主人公とジャム作りをしたり、たらいを使用して洗濯をしたりする場面もある。この生活に対して、周囲の人や、おばあちゃん自身も「オールド・ファッションなのかもしれない」と言っているのだが、私はそれも良いのではないかと思う。昔があり、今がある。時代は急速に流れていく。今が過去になるのも一瞬のことである。私は「今」と「昔」のどちらかを肯定し、またどちらかを否定する必要はないと思うのである。どちらが良いかはその時々の自分が決めれば良いのではないだろうか。古いものには古くからの知恵があり、新しいものには新しいアイディアが込められていると思うのだ。よく学び、良いものを自分で決定・選択し成し遂げる。そんな言葉では簡単なことを、私たちは自ら困難なものにして日々を生きているように感じた。そして、そんな人間のもどかしさと命の愛おしさ、貴さを感じずにはいられなくなった。

いつも優しく大きな愛を持って主人公を教え導くおばあちゃん、そのおばあちゃんの心の支えになっている、過去に亡くなったおじいちゃん、不登校になった主人公を問い詰めずに見守る両親や転校先で出会うことになる友達は、それぞれがそれぞれの孤独や痛みを持ち、相手を思いやり信頼しあいながら生活している。それは今も昔も変わらない大切な繋がりであり、目に見えない「愛」の正体なのではないかと感じる。おばあちゃんが「魔女修行」によって教えたかった魔法は「愛」であると感じた。必ず死が訪れると知りながら、なぜ人は生まれ、生きようとするのか。たくさんの困難を乗り越えて魂を成長させるのはどうしてだろう。それは、愛や幸せを感じ、その感じたものを今度はまた違う人に与えるためではないだろうか。

短編の小説ではあるが、この作品を通じて、不登校という社会的な問題から人間関係の構築の難しさと、生と死を通して人間の存在について改めて考え直すことができたように思う。「魔女修行」と主人公の成長は、私に、今後生きていくための発見と気づきを与えてくれたように思う。

優秀賞作品

『職場ストレス問題』について

経営ネットワーク学科　池畠　明日美

❶はじめに

近年、どの職業においても「職場ストレス」による精神疾患が急増している。中でもうつ病は30～40代の働き盛りや若者にも目立つようになった。これは日本社会だけではなく、先進国でも大きな労働問題とされている。職場は労働者にとって重要な生活環境だ。しかし、グローバル化に伴う労働条件や制度の緩和により、労働者の健康が蔑ろにされている職場が増えている。この論文では労働者を取り巻く環境の変化について調べ、職場ストレスとは何か、今職場で一体何が起きているのか、職場のあり方とは何かについて考察する。

❷職場ストレスとは何か

職場ストレスは、簡単に言うと「職場におけるストレス、仕事に関係するストレス」である。ストレスは現代の日本においてよく使われる言葉であるが、医学的には外部の刺激に対する反応のことをいう。

例えば道路に面した会社で騒音が酷いオフィスがあったとしよう。労働者は、毎日、車が道路を走る音に耐えながら日常業務をしなければならない。この場合、うるさいと思う騒音を刺激とすると、この刺激に対して起こる反応としては集中力の半減、気持ちの苛立ちなどが挙げられる。騒音の度合いにもよるが、常に聞き続けなければならない状況下におかれた場合、間接的な被害として精神的ストレスによる胃腸障害や精神障害、直接的な被害として聴力の弱化による難聴といった重い障害を持つ可能性がある（日本音響学会（1978）p.27）。上記の例は主に労働環境に起因するものだが、実際には長時間労働といった労働条件や職場いじめなどの人間関係、社会的背景といった様々な要因が複雑に絡んでいる。それでも労働者にとって職場は、仕事を行い、給料を得て、自身又は家族の生活を支える、言ってしまえば生きるために必要不可欠な場所である。すなわち、失職してしまえば自分どころか家族も暮らしていけなくなるのだ。だからこそ、いくら職場でストレスを感じたとしても辞めるに辞められない労働者は多い。

❸今、職場で何が起きているのか？

厚生労働省の「労働者健康状況調査」によると、仕事に対してストレスを感じている労働者は全体の6割であり、1980年代と比較するとストレスに悩む労働者は増大し、今は過半数に上っている（図1）。年齢別に見ると30代が66・2％、40代が65・2％となっており、特に働き盛りに多い傾向が見られる。

何故、会社でも人事管理などを任される重要な年代の彼らにストレスを感じている人が多いのだろうか。ストレスを内容別に見ると、「職場の人間関係の問題」が35・1％、次いで「仕事の量の問題」が32・3％、「仕事の質の問題」が30・4％となっている（図2）。この結果を受けて多く回答されていた「職場の人間関係の問題」と「仕事の量の問題」について以下で考察したい。

（1）労働者を追い詰める職場の人間関係

職場ストレスの内容として最も割合が高かったのが「職場の人間関係の問題」である。中でも多いのが「上司と部下の関係」だ。荒井千暁は「現代の職場において、部下を潰してしまう最大の元凶は上司である一方、逆に部下の健康を守ることができるのは、何をおいても上司なのである。」（荒井（2006）p.70）と述べている。実際に一方的に指示を出すだけで休暇を与えない空気を作りだし、仕事に対して必要以上のプレッシャーをかける上司はいる。その反面、仕事の経験を積んでいる上司は部下のよき相談相手にもなれる存在だ。

しかし、現代の職場では上司の働きかけが少ない。むしろ経営トップ以外の上司も、部下と上司に挟まれて職場ストレスの餌食になっている。その原因の一つとして挙げられるのが成果主義の影響だ。会社が成果主義を導入すればそれぞれの労働者は自分のことで精一杯になり、職場は余裕がない雰囲気になる。これは職場を提供する大元の企業にも問題があるということではないか。こうした問題についての詳細は次の章で述べたい。

人間関係の深刻な問題の一つとして「職場いじめ」がある。「職場いじめ」は特定の労働者だけに嫌な業務を押し付ける、仕事に必要な情報を教えないなど仕事に直接関係するものから、労働者を孤立させる、嫌味を言うなど

間接的にストレスを与えるものがある。

実は近年、リストラや人員整理に「職場いじめ」が利用されている場合がある(宗像(2000)p.29)。理由は手間とコストがかからないからだ。労働基準法では労働者を解雇し退職させる場合、企業側は事前に説明又は30日以上の平均賃金を支払わなければならない(労働基準法　第20条)。しかし、生き残るために人件費を削減したい企業にとっては非常に面倒なものである。そこで地方工場への左遷や今までとは全く異なった業務の押し付けが行われるのだ。子供の教育費など家庭を支えなければならない立場の労働者が精神的・肉体的に追い詰められるのは言うまでもない。

(2)労働者の仕事時間と睡眠時間の変遷

「明日まで頼む」と上司に山積みの書類を渡された。定時で終わらせるような量ではなく、残業するしかない―というように「仕事の量」は労働時間に影響する。NHK放送文化研究所の調査によると、労働者の半数が一日8時間以上働いており、また10時間を超えて働く人の割合も徐々に増えている(図3)。この労働時間と反比例の関係にあるのが睡眠時間である。有職者の場合、1995年は7時間15分であったのに対し、2005年には7時間05分と短くなっている。

長時間労働の増加は労働者に肉体的・精神的苦痛を与えるだけではなく、過労死や過労自殺の原因となる。反対に睡眠は心身の疲労を回復し、ストレスの解消方法として有効な方法とされている。しかし、この睡眠時間が削られているとなれば、仕事に集中できなくなるなど、ストレスは蓄積される一方ということになる。

仕事の量が多く、労働時間も長い。しかも夜は眠れない。現代の労働者は悲鳴を上げている。

❹職場ストレスを作り出した社会背景

宗像によると20世紀後半から運輸・情報技術の急激な発展に伴い、日本でも地球規模の市場を見据えた企業経営が求められるようになった。また、世界市場で生き抜くためには「本当に必要とされるものを創造し、必要とする人々にタイムリーに届けることで"差別化"をはからなければ存在価値をしめせない」(宗像(2000)p.18)という考え方が重要視された。この大量生産大量消費の時代とは違うニーズは現代の日本市場にも当てはまる。"差別化"を図るため企業が取り組んだのが「成果主義」と「人員整理」であると宗像は考えている。

世界市場のニーズに合った商品を売り出すには、今までにない考えを持った優秀な人材が必要とされた。そこで導入されたのが「成果主義」という人事評価制度である。「成果主義」は、年齢・勤務年数、人事査定で評価する「年功序列制」とは違い、実力のある、結果の出せる労働者を評価し、優遇する。

これにより社員個人の能力を伸ばすものだが、問題もある。まず、「成果主義」で優遇される労働者はほんの一握りで、その他多くの労働者は結果を出さなければ減給されるという不安を抱えて働かなければならない(宗像(2000)p.15)。職場内の競争が激しくなれば、保身のための個人主義が芽生える。一人で多くの仕事を抱えたり、労働者一人一人が自分の事で精一杯になれば職場全体の余裕もなくなるだろう。コミュニケーションが希薄化し、人間関係に悩む人が多くなるのも頷ける。

また、効率よく利益を出すためには支出(主に人件費)を最小限に抑えなければならない。そのために行われたのがリストラに代表される「人員整理」である。この動きを受け、「労働者派遣法」の改正等が実施された結果、正社員の数は大幅に減らされ、代わりに賃金の安い派遣労働者が増加した。「雇用の格差が広がり、一方には、長時間・過重労働の『競争』を強いられる『正規労働者』が存在し、他方には、生活保護水準以下の収入で、無権利な労働を余儀なくされている大量の『ワーキングプア』が輩出されてきた」(福地(2008)p.75)という状況は労働者に、心身を壊してでも働け、と言っているようなものである。このような劣悪な労働条件下の職場でストレスを感じない人はいないだろう。

❺「ワーク・ライフ・バランス」の推進を考える

厚生労働省は少子化対策と職場ストレスの対策として、2008年7月から大手企業10社と「ワーク・ライフ・バランス」を推進している。「ワーク・ライフ・バランス」とは「仕事と生活の調和」であり、仕事以外の時間の充実を求める活動である。内容としては企業の経営トップが「仕事と育児・介護の両立支援」や「職場コミュニケーションの活性化」、「有給休暇取得の促進」などを発表し、実際に取り組む。労働者が仕事にゆとりを持つことができれば、モチベーションを上げ生産性を向上させることができる。

だが、内閣府の「ワーク・ライフ・バランスに関する意識調査」では、「仕事を優先」を希望するのは全体で2%に対し、現実は約半数の48・6%が「仕事を優先」と答えている。労働者の多くが生活の優先を望む一方で仕事を優先せざるをえない現状が分かる(内閣府(2008)p.4)。

企業のトップが労働者の働き方を支援するのには賛成だが疑

問もある。例えば、定時帰宅を推奨する場合、人手不足の場ではゆとりを持つどころか仕事がより過密にならないか。経営トップが考えるので現場の意識とのズレはないか、特定の役職だけが優遇されないか。力のない中小企業では実現は難しくないか、などいくら企業側で労働時間や労働条件を改善したとしても、一人が抱える仕事量が変わらなければ効果はないように思える。

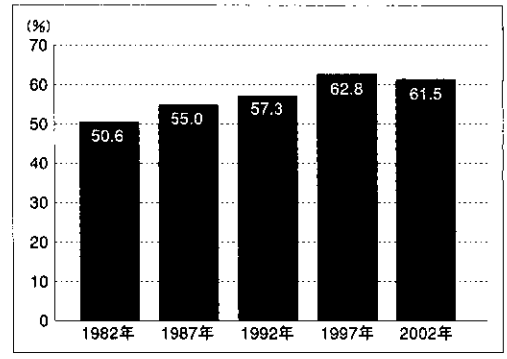
❻まとめ

職場ストレスはどの業種の職場にも存在し、労働者はストレスを抱えやすい状況にあると言える。警察庁によると、勤務問題を理由とする自殺者数は、1978年の855人から2007年には約2倍の1807人と、年々増加傾向にある(警察庁(2005))。労働者を死に至らしめるほど職場ストレスや過労が蔓延する原因を作った政府や企業のトップの責任は重い。リストラ、裁量労働制、成果主義、フレックス・タイムなど、日本はアメリカの制度を導入してきたが、その大半が企業にとって都合よく労働者を働かせるための制度となっている。密かに導入されようとしていた「ホワイトカラーエグゼンプション」は、一定の職業において労働時間が成果と必ずしも比例しない事を受け、労働時間の規制を外し、自ら労働時間を決められる制度である。しかし、労働時間の長さで支払われていた残業代や休日出勤手当がなくなり、企業は人件費を抑えながら労働者に長時間労働を強いる問題がある。また、人事評価も評価基準が曖昧で、適切な評価をできずにいる職場が多い。

今、職場に必要なのは仕事のゆとりである。労働者は人間であり、人がこなせる仕事量は限られている。現状を改善するならば、第一に正社員を増やすことが望ましい。一人の仕事量を過剰にせず、働き方に柔軟性を持たせても良いだろう。成果主義も良い側面はあるが、職場の状況によって見直すべきである。

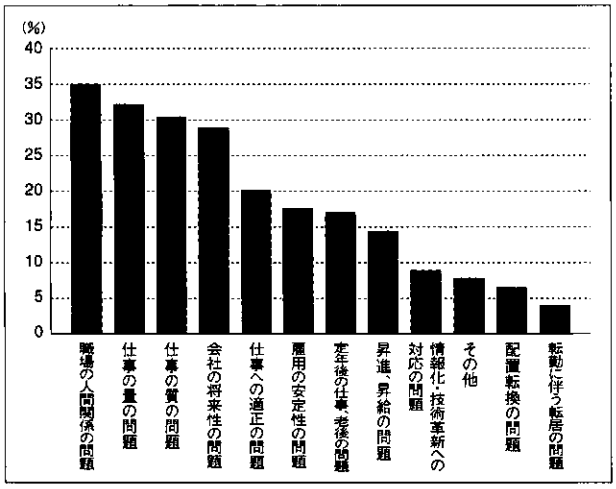
企業は現場の声をよく聞き、労働者にとっての会社作りを考えるべきなのだ。これを実現するにはまず、労働者自身が声を上げて訴えていくしかない。また経営トップもこの声に耳を傾けるべきだろう。企業の上が変われば良くも悪くも影響が出るのが職場なのだから。

(図1)仕事でストレスを感じる人の割合



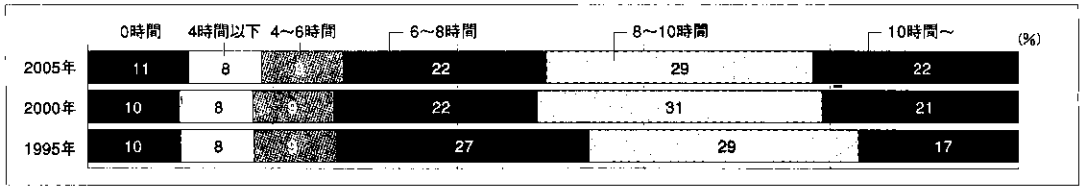
(厚生労働省2002年「労働者健康状況調査」
福地(2008)「労働者の疲労・過労と健康」より転載)

(図2)仕事や職業生活に関する強い不安、悩み、ストレスの内容(3つまでの複数回答)



(厚生労働省2002年「労働者健康状況調査」より転載)

(図3)労働者の労働時間の分布



(NHK放送文化研究所2005年「国民生活時間調査」より作成)

引用文献

・荒井千暁(2006)「こんな上司が部下を追いつめる ― 産業医のファイルから」文藝春秋
・NHK放送文化研究所(2006.2)「2005年国民生活時間調査報告書」
http://www.nhk.or.jp/bunken/research/life/life_20060210.pdf
・警察庁(2008.6)「平成17年中における自殺の概要資料」
http://www.npa.go.jp/toukei/chiiki6/20060605.pdf
・厚生労働省(2003.8)「平成14年労働者健康状況調査」
http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/saigai/anzen/kenkou02/r1.html
・宗像恒次(2000)「働く人たちのストレスサバイバル ― いじめ・リストラ・セクハラ」明石書店
・内閣府(2008.9)「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)に関する意識調査」
http://www8.cao.go.jp/wlb/research/pdf/wlb-net-svy.pdf
・日本音響学会(1987)「騒音・振動」コロナ社
・福地保馬(2008)「労働者の疲労・過労と健康」かもがわ出版
・厚生労働省(2008.7)「仕事と生活の調和推進プロジェクト」
http://www.mhlw.go.jp/bunya/roudoukijun/sigoto-seikatu/index.html
・松崎一葉(2007)「会社で心を病むということ」東洋経済新報社
・連合総研(2006.10)「第12回勤労者短観」
http://www.rengo-soken.or.jp/houkoku/kinroukurashi/enquete/No12/12report.pdf

Xboxを使った英語教材の制作

経営情報学部 竹内 典彦

本学では、無限大キャンパスや野幌高校との高大連携等、eラーニングによる英語教育に取り組んできましたが、現在マイクロソフト社との産学共同事業として、また私立大学施設設備補助事業として、Xbox360を用いた「ユビキタスIT英語教育環境の開発」を進めています。メディア教育センターで、学生によるコンテンツ開発が着々と進行中です。「XNAクリエイターズクラブライセンス」と呼ばれる、マイクロソフト社のライセンスの利用による開発環境は、学生自身がコンテンツ開発するための最適な環境です。その可能性は、ゲーム開発のみにとどまらず、様々な教育コンテンツにも広がります。ともすれば教員の視点で作られがちだった教材を、学生自身がアイデアやセンスを生かしながら開発することが、XNAを利用する最大のメリットです。マイクロソフト社やパートナー企業が提供する開発ツールや情報を最大限利用しています。このプロジェクトにより、学生がコンテンツ開発のノウハウを学び、さらには完成したコンテンツの利用者が、英語学習に興味を持ち、総合的な英語力の向上が促進されると確信しています。8名の学生開発チームの1人、メディア学科4年の谷口卓哉君は、「CGのスキルはもちろん、ユーザーの視点から開発することを経験して自信がつきました。就職してからも役立つと思います。」と語り、同じくシステム情報学科4年の當田昌己君は「このプロジェクトを通して、プログラミングの経験を積めたし、人とのコミュニケーション能力も身につきました。」と満足そうに語ってくれました。

i場所（いばしょ）プロジェクト

情報メディア学科　准教授　隼田尚彦

2007年度に医療情報学科の（当時）長尾先生と本学内の学生の居場所について議論をしたことが本プロジェクトの出発点でした。居場所の面積と種類の少なさについて改善案を検討し、我々の個人研究費を用いて、LLメディア実習室前のアルコーブ※状の空間にソファ・スツール・テーブルを配置・整備しました。その後、2008年度の学内共同研究「大学内における学生の居場所の構築と学生の行動変化：環境行動学的試み」として、本i場所プロジェクトを展開していきました。本プロジェクトは、元山奈保美（医療情報学科）・廣瀬千佳（情報メディア学科）・遠藤明美（同学科）・志田佳菜子（同学科）の4名の学生と我々2名の教員で、周辺他大学等を視察し、それらの知見を基に、本学の限られた空間・環境の中で学生の居場所を確保しようとしたものです。

写真1：コルビュジェの椅子でくつろぐ人々

2008年度は、中庭にパラソルつきのテーブルと椅子のセットを設置し、次に非常勤講師室と大学院生室の間のアルコーブにソファとテーブルを2セット設置、最後に学生プラザから講堂に向かった突き当りにテーブルと椅子のセットを設置しました。

非常勤講師室と大学院生室の間のアルコーブに設置した黒いソファ（写真1）は、20世紀を代表する近代建築の巨匠、ル・コルビュジェ（1887-1965）によるデザインです。「LC2」というソファで、「グラン・コンフォート（大いなる快適）」と名づけられ、1928年にニューヨーク近代美術館にコレクションされています。

また、学生プラザから講堂に向かった突き当りに設置されている赤い椅子はデンマークを代表する世界的建築家アルネ・ヤコブセン（1902-1971）のデザインによる「スワンチェア」を模したものです。スワンチェアとは足の形状が異なりますが、ここは安定性を重視しました（写真2）。

非常勤講師室と大学院生室の間のアルコーブは、教職員がくつろいだり、学生と打ち合わせをしたりすることを主な行動場面として想定し、高級感がありシンプルで落ち着いたLC2を設置しました。一方で、講堂前のスペースは学生プラザに比べ暗いため、出来る限り明るく暖かい印象を与える椅子としてこの赤い椅子を選定しました。

これらの空間は、より良い居場所づくりのため、ネットワークを経由して利用状況を画像データとして蓄積しています。調査研究に関しては、個人を特定できるようなプライバシーに関わる情報を公表することはありませんが、何人くらいでどのような利用方法が多いのかを分析し、今後の居場所構築の基礎的データとして活用し、今後も少しずつ整備する予定です。

※アルコーブ：部屋や廊下、ホールなどの壁面の一部を後退させてつくられた空間のこと。

写真2：講堂前の空間でくつろぐ学生たち

大学院留学生・何嵩昊君 国際会議で研究発表・好評を博す！

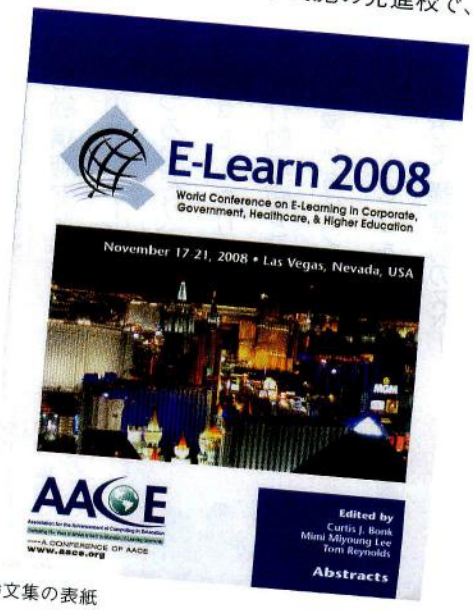
E-Learn 2008,Nov. 17-21, Las Vegas, ND, USA

E-Learn 2008の正式名は、"13th World Conference on E-Learning in Corporate, Government, Healthcare, & Higher Education"というもので、高度に複雑化しつつある社会におけるさまざまな学習要求に応えるためのE-Learningに関する最も伝統ある国際会議である。1996年にスタートして今回は13回目を迎え、参加者は65カ国から1000名以上、発表論文は987件の応募から審査の結果、391件（約2.5倍）が受理されたという。日本からの発表は30件以上に上り、また今回の新しい試みとして、アジアでの著しい発展を背景に"E-Learning Asia Style"という特別のプレシンポジウムが企画され、東・南西アジアの12カ国からの発表・討論が行われたという。

何君が発表した論文タイトルは、"Towards New Collaborative e-Learning and Learning Community Using Portfolio Assessment"（He Songhao,K.SAITO,T.KUBO and T.MAEDA）と題され、一般の15分程度の口頭発表ではなく、Research/Technical Showcaseセッションで、指定された場所において約90分の発表・質疑応答を行う形式であった。発表論文の主旨は、「一般にeラーニングは、始めやすいが学習動機の継続や目標達成が難しい」といわれる問題点に対して、非同期の環境の中で同じ科目を学ぶ学習者が仮想的なクラスに参加し、クラスメイトと可能な範囲で協力・協調を行う「弱い協調学習」（教え合い、内省・メタ認知等を含む）を実現すると同時に「学習プロセスに応じた形成的評価を積み重ねながら学習目標を達成する仕組み」と「推論による学習支援」からなる解決策の提案である。

11月19日（水）午後5:30のスタート直前にまず訪れたのは信州大学の不破教授で、最後に「このシステムはもう実際の教育で使用されているのか?」と質問され、いささかびっくり。信州大学は単位認定型eラーニング実施の先進校で、eラーニングのみによるインターネット大学院も開設している。これに続いて、スタンフォード大学の黒人院生、数名の米国研究者、スエーデンからの女性教員2名、アジア系の数名のグループ、韓国の女子院生など、次々とさまざまな訪問者による質疑に、何君は汗だくの応対となった。主な質問は「新しい協調学習」と「推論による学習支援」に集中し、発表論文の核心的な部分でもあり、デモを含む熱心な説明が行われた。用意した約30部の資料は1時間弱でなくなり、上述の黒人院生は他の1名とともに、また韓国の女子院生も再度訪れるなど、反響の高さを感じつつさらに詳細な説明を加えるという一幕もあった。

eラーニング本来の「いつでも、どこでも、だれでも」がそれぞれの学習成果を上げる仕組みとしての「弱い協調学習」の実現は、基調・招待講演でのトピックでもある参加型学習やWeb2.0技術等と同方向で親和性も高く、今後さらなる進展が期待される。

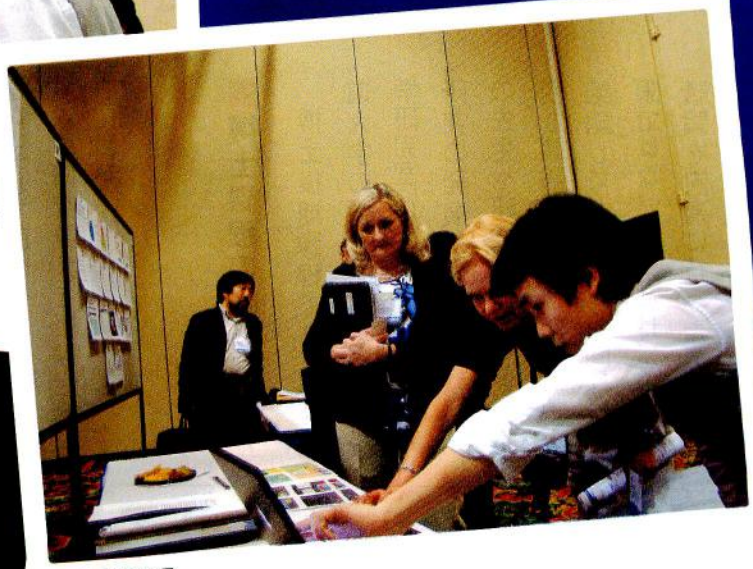


論文集の表紙

招待講演会場

発表用ブース

発表・議論風景



発表・説明風景

会場となったホテルの夜景

本学大学院修士課程を修了されました、三浦克宜さん、鄭成さんのお二人が、このたび、北海道大学大学院より学位「博士（情報科学）」を取得されました。お二人の博士論文のタイトルと概要、そして、学位取得の喜びと後輩諸君へのメッセージをご紹介します。

『Generation of Equivalent Transformation Rules via Logical Equivalence』

（論理等価式を経由した等価変換ルールの生成に関する研究）

三浦 克宜さん（平成16年3月修了）

学位を取得した三浦さん

■研究概要

与えられた仕様に対して、正しくかつ効率的なプログラムを作ることは重要なことなのですが、その作り方を一般的な手続きにより定式化することは非常に難しいです。等価変換（ET：Equivalent Transformation）計算モデルに基づくプログラム生成理論は、正しくかつ効率的なプログラムを作ることを可能とします。この計算モデルでは、より良いETルールを探索し、生成することが重要であるとしています。本研究では、より良いETルールとは何なのか、そして、そのETルールを効率的に生成するにはどうしたらよいか、という課題に着目し、これらを解決するために、論理等価式（LE：Logical Equivalence）と呼ばれる論理式を新たに提案し、LEを経由してETルールを作るための方法を明確にし、その基盤となる理論を構築しました。

■北海道情報大学での思い出

修士課程では、前田先生のもとで学習支援システムの開発に関して研究していました。私は、系列の北海道電子計算機専門学校を経て修士課程に進学したので、入学したての頃は、研究について右も左もまったく分からない状態でした。しかし先生方のご指導により、在学中には、国内の研究会やシンポジウム、そして国際会議などの多くの研究発表を経験させて頂きました。

■博士課程の経験談

博士後期課程では、北海道大学の情報システム設計学研究室に在籍していました。研究の発展には、指導教員の先生や研究室の学生との密な議論が重要になります。議論してもらえる時間は無限ではないので、私は、常に、議論を円滑に行うための資料の作り方を考え、それを実行してきました。例えば、議論用の印刷資料は、カラーペン（蛍光ペン）などを使って要点や着目して欲しいポイントを直感的に分かりやすくするように心がけていました。

■後輩へのメッセージ

目標を達成するためには、必ず新しい知識や技術の獲得が必要になり、そして、それらの円滑な獲得には、“議論する力”が大きく影響すると、私は考えています。これから皆さんは卒論や修論を執筆すると思います。そのとき、良い研究成果を挙げるとともに議論する力も向上するように努力してください。 by 三浦 克宜さん

学位「博士（情報科学）」取得 おめでとうございます！

『Study on Construction of Query-Answering Systems in the Semantic Web』

（セマンティック・ウェブにおける求解システム構築に関する研究）

鄭 成さん（平成17年3月修了）

シンガポールの学会にて
（写真左 鄭さん）

■研究概要

セマンティック・ウェブは、論理式で書かれた知識をウェブに配置し、機械で処理することによって高度な知識処理を目指すものです。セマンティック・ウェブにおける現在の重要な研究課題は、記述論理で書かれ概念関係と節でかかれたルールの表現を結合した強力な知識表現計算体系を確立することです。本研究では、求解問題の解法を、ボトムアップ計算法とトップダウン計算法の2つの方針で提案しました。またその提案に基づいて、求解問題を全自動で解くシステムの実現方法を考案し、実装を行いました。提案方法は、まず問題を記述する論理式から節へ変換し、その節から等価変換（ＥＴ）ルールを生成することにより、問題を解決しました。

■北海道情報大学での思い出

入学時には日本語がほとんど話せませんでした。親切で信頼できる前田先生、齋藤健司先生、斎藤一先生に恵まれ、研究面のみでなく生活面まで、色々と有益なアドバイスやサポートをいただけました。また、先端的な研究設備が揃っており、勉強環境は最高でした。北海道情報大学で楽しかった勉強生活は大切な思い出として、心の中に残して、一生に忘れません。

■博士課程の経験談

研究をうまくいけるため、よく考えて新しいアイディアを発想することと、指導教員の先生とよく議論することが大切だと思います。自分の研究成果は定期にまとめジャーナルへ投稿し、発表できるように毎日努力しなければなりません。学位論文執筆の過程において、これまでの知識だけでは不十分で新たに勉強した分野が、自分の知識レベルを大きく向上させてくれました。学位取得活動を通じて得た知識や経験は、私の人生における大きな拠り所になってくれると感じています。

■後輩へのメッセージ

思う念力岩をも徹す という中国のことわざ「精誠所至、金石為開」があります。

心を込めてすれば、できないことは何もないです。

by 鄭 成さん

本学大学院修了生の博士号取得者は三浦さん、鄭さんを含め、計4名となりました。お二人のこれからのご活躍を期待しております。

〈監修〉
情報メディア学科
前田 隆、斎藤 一
システム情報学科
齋藤 健司

〈ページデザイン案〉
情報メディア学科3年
星 健太郎
高橋 達也（斎藤一ゼミナール）

UCSCにおける国外研修

経営情報学部 教授
谷川 健

私は、本学と国際交流協定を締結している米国カリフォルニア大学サンタクルーズ校（UCSC）の工学部における２００８年10月1日から12月18日までの約80日間の研修の機会を与えていただきました。研修の内容やサンタクルーズの様子などを簡単に紹介いたします。

研修は、UCSC工学部コンピュータサイエンス学科の主任であり本学の北海道情報大学フォーラムに参加されたＩｒａＰｏｈｌ教授の下で、主にJim Whitehead准教授の大学院のゼミナールに参加させていただくことで実施しました。ゼミナールの内容は、ソフトウェア工学の最新のトピックを取り上げるもので、今期（２００８年秋期）では、Generative Programmingに関する技術が取り上げられました。Generative Programming技術は、仕様からプログラムを自動生成する技術の総称です。決して新しい技術ではなく、古くはコンパイラの技術も含まれるものですが、最近でもソフトウェア開発の生産性を高めるための技術として注目を集めています。ゼミナールでは、学んだ内容についての簡単なプロジェクトを課題として与えられます。私は、モデル駆動開発の手法を使ったRuby on Rails（ＲＯＲ、Ｗｅｂアプリケーションフレームワーク）プログラム自動化に取り組み、ＲｏＲが本来持っている自動化の機能を補完でき、保守性のよい方法を確認することができました。

大学院のゼミナールに参加して感じたことは、講義がディスカッション主体であるということです。私が担当している大学院の講義では、教員から学生に知識を伝達するということで、教員からの説明の時間が多くなってしまっているのですが、参加したゼミナールでは、1回の講義で2本の論文のレビューを行うのですが、講義の前に2本の論文を全員が読んでいることが前提で、講義では最初から議論が始まります。私が、同じような講義をすると、だれか一人の学生に論文の説明をさせてしまうと思うのですが、この方式だと、担当の学生以外は講義の前に真剣に論文を読む必要がありません。ところが、Ｊｉｍ先生のゼミナールでは、最初から、教員が内容についての質問をし、学生が答えることにより議論を進める方式をとっており、学生は事前に論文を熟読していないと議論に参加できないことになります。最初は、大学院の講義だからと思っていたのですが、聴講させていただいた学部の講義でも、事前にテキストを読んできていることを前提にした講義が進められていました。おそらく、高校までの教育で講義は準備をして受けるものだという習慣が身に付いていると思われました。UCSCの講義のやり方を本学でそのまま実施することはできないと思いますが、講義を受けるには準備がいることを意識できるような講義を心がけたいと思いました。

さて、サンタクルーズ市は、人口5万程度で広さが約31㎢と比較的小さな街です。UCSCは、山のほうにあり、森林の中にある大学で、鹿やリスが大学の建物や人が通る道路のすぐ近くまでやってきます。夜は星がいっぱい見えて、とてもきれいです。本学も自然が豊かなほうだと思いますが、UCSCは2枚か3枚上をいっていると思います。サンタクルーズは、山と海に囲まれた街で、30分から1時間くらいかけて山にいけば、ハイキングやMTBが楽しめ、20～30分くらい歩くと海に出てサーフィンができます。また、雨が少ないのも特徴でしょう。10月と11月の2か月で3～5日くらいしか雨は降りませんでした。日本語で暮らせるのならぜひ住んでみたいと思いました。

最後に約3カ月間の米国での研修の機会を与えていただいた本学の教職員と学生のみなさまに感謝いたします。

「キャリアデザインⅡ」で本学OB2人が講演

情報メディア学科 教授　三浦 洋

昨年度から開講されている「キャリアデザイン」（前期「Ⅰ」、後期「Ⅱ」）は、成年を迎える2年生全員が自分の将来をしっかりと考え、定めた目標に向かって知識・能力・資質を高めていく必修科目です。今年度のカリキュラムは昨年の授業をバージョンアップした内容で、その一環として11月2日、松尾記念館講堂で本学OB2人が後輩たちを前に講演しました。講師をつとめたのは、ともに札幌に本社を置く情報系企業に勤務する西村誠さん（情報メディア学部を平成18年卒業、「テクノフェイス」勤務）と橋本伸弥さん（経営情報学部を平成13年卒業、「つうけんアドバンスシステムズ」勤務）です。

前半は仕事のやりがいや社会人生活について2人が講演、後半は担当教員・三浦の司会でQ&Aが行われました。その中で西村さんは、「一般教養を学べるのは大学時代だけだから、その機会を生かすべきだ」と力説、橋本さんは、「仕事では金銭に関わる案件が多いので、大学で会計のことを学んでおくとよい」と語りました。また、システム開発の仕事を進める上で、基本的な考え方では大学で学んだことが役立っていると口々に述べ、ゼミ選びや企業選びのポイントについても具体的にアドバイスしました。さらに質疑応答では、「IT職場は3K（きつい、汚い…）どころか9Kだというのは本当か？」という後輩の質問に対し、「自分の場合、この道で行くしかないと覚悟を決めた」と2人ともきっぱり。年齢の近い20代の先輩たちの講話に、出席者は熱心に聞き入りました。

昨年は映画「AI wayS 三丁目の夕日」のCG制作に携わった佐々木嘉久さん（情報メディア学部を平成16年卒業、「プレミアムエージェンシー」勤務）に講演して頂きましたが、今年は講師依頼に関し斎藤一先生、棚橋先生にご協力頂きました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。担当教員一同（三浦、小西、非常勤講師4人）さらに充実した「キャリアデザイン」の授業づくりを進めて参りますので、今後とも各位のご協力をお願い致します。

Club Introduction クラブ紹介

レゴ部。 LEGO CLUB

みなさん、こんにちは! レゴ部。部長の齋藤恵利佳です。

レゴ部…?そんな部活、うちの大学にあったんだ!と思われるのが、正直なところだと思います。しかし、皆さん思い出して下さい。

— 小さな頃に一度くらいレゴブロックで遊んだ記憶ってありませんか?

もしかしたら、学内にも「隠れレゴファン」がまだまだいるのかな〜と思うとワクワクします。私もレゴ好きが高じて、昨年このレゴ部。を立ち上げました。名前は、「レゴ部。」ですが、未だ「部」ではありません。サークルです。

現在の主な活動は、レゴブロックを使って好きな作品を作ったり、小中学生を対象としたレゴ教室のサポート、時にはさっぽろ雪まつりで「雪像制作」をしたりと、様々な活動をしています。また、2月にはコンテスト(画像参照)にも出場しました。春からはNXT を使った、ロボットのレゴ制作も活動予定中です。

活動雰囲気は、私からみても自由奔放です。しかし、「つくる」となると部員全員が夢中になって作ります。

レゴには「よく遊べ」という意味も存在しています。皆でよく遊んで、よく食べて、たくさん笑って過ごしていければと思います。

もちろん、長く続くことを祈って…笑

システム情報学科4年　部長　齋藤 恵利佳

第60回さっぽろ雪まつりにて。
江別市ご当地キャラクター「えべチュン」雪像を、部員で作りました。雪像制作は初心者ばかりでしたが、プロのご指導もあり、素敵な作品に仕上がりました! これを機に、毎年続けていきたいです。

■8月某日

小中学生向けの、レゴ教室の準備中。204教室の装飾や、当日のサポートも行いました。今後も続ける予定です♪

よく遊ぶ! これがレゴ部。の掟

■1月某日

レゴオリジナルモデルコンテストの準備中。まずは、説明書を見ながら、買ってきたばかりのレゴを組み立てることに。この時間が1番熱中します!

部員大募集!

「レゴで遊びたい」と少しでも思ったそこのあなた!
是非、お気軽にご連絡お待ちしております♪

レゴ部。メール：s0612013@rmme.do-johodai.ac.jp
レゴ部。ブログ：http://レゴ部.jp

いよいよ動き出したFD活動

── 教育GPフォーラム報告 ──

２００８年度から教務部長が設けられ、初代教務部長である冨士先生が委員長となるFD委員会が発足しました。まさに、２００８年度は本学のFD元年と言える年でしょう。この年に、ＩＣＴを利用したFD活動をテーマにした「ＩＣＴによる自律的FD推進モデルの構築」が文部科学省の教育GPとして採用されました。２００９年３月６日に、本学２１３教室において、本年度のFD活動の総決算として教育GPフォーラム「FDが拓く大学の未来」が開催されましたので、フォーラムの概要について報告いたします。

教育GPフォーラムは、二部構成で実施されました。第一部は、中居事務局長の司会で、嘉数学長の主催者挨拶に続いて、独立行政法人メディア教育開発センター（ＮＩＭＥ）理事長の清水康敬先生による「ＩＣＴ活用による教育改善」に関する講演がありました。この講演では、FDやＩＣＴの大学における普及・推進に関する国の施策の紹介、ＩＣＴ活用教育における諸外国の状況、ＩＣＴ活用教育における日本の現状とＮＩＭＥの取組、ディジタルネイティブ世代の到来などについて、実例を挙げながらわかりやすい説明を聞くことができました。フェニックス大学の事例では、eラーニングによる授業が成功するためには、教育の専門家が授業をデザインし、少人数のクラスで十分なサポート体制のもとに授業を進めることがポイントであると指摘されました。また、当初eラーニングは対面授業と比較して学習効果が期待できないとの意見が一般的であったが、韓国や米国では、対面授業と同等あるいはそれ以上の効果が期待できることが最近認識されるようになってきて、メディアを使った教育が今後ますます重要になるとの認識を得ました。最後に説明されたディジタルネイティブ世代とは、インターネットという双方向メディアを使いこなす世代のことで、この世代に合わせた教育が今後重要となることが強調されました。

続いて、仏教大学教職支援センター長の原清治先生による「大学全入時代におけるFDの今日的課題」と題する講演がありました。この講演では、仏教大学と大学コンソーシアム京都におけるFDに関する取組の経験を踏まえて、学生の「満足度」の要因の変化とそれに応える双方向型の講義の実践例、相互研修型とＦＤｅｒ（FDの専門家）牽引型のFDの２つのスタイル、FDの目的の変化と組織的なFDの必要性、ＩＣＴ

活用とFDなどについて説明がありました。FDの目的は、教員中心の教え方を磨くことから、職員や学生も含めた学生の大学での成果をより高めることに変化すべきであることが指摘されました。特に、大学全入時代では、初年次教育やキャリア教育が重要で、卒業生の質の保証が求められるので、そのためのFDという認識が重要だと理解しました。このことは、清水先生が、北海道情報大学が輩出する学生の能力を伸ばすためにFDをどうするかが重要だと指摘されたことと相通じるものがあると思います。また、教員の意識が「研究」重視から「研究」と「教育」の両方が大事だと変化する中で、組織的なFDの重要性が指摘されました。その中で、FDの必要性を理解していただけない教員がどの大学にもおられ、この教員のことを「波を立てても、光をあてても動かない『深海魚』」と例えられたのは、印象的でした。ICT活用とFDでは、本学でも来年度から利用するクリッカ（講義中にリアルタイムで学生のレスポンスを収集しスクリーン等に結果を表示するシステム）が有効であるとのお話がありました。第二部は、経営情報学部長の林先生の司会で、教務部長でFD委員長の冨士先生から本学のFDの取り組み、とりわけ教育GPプロジェクトの概要の説明があったあと、8つのワーキンググループ（WG）のリーダから、各WGの活動報告と来年度の活動計画が発表されました。この件に関して原先生から「盛りだくさんの内容を網羅的に取り組んでおられるので、あせらずじっくりと取り組んで、最終年にはきっちりとした評価をされることを期待する」とのコメントをいただきました。本学のFDもやっと動き出したところです。今回のフォーラムをきっかけに、清水先生、原先生が指摘された本学の卒業生の質を保証するために、教職員一丸なり、学生も巻き込んでFD活動に取り組んで行けたらと思いました。なお、FDフォーラム終了後、関係者が集まり、教育GP推進協議会およびFD評価委委員会が開催されました。

学生サポートセンターからのメッセージ

「戦後最大の経済危機」、「100年に一度の危機」に形容されるように、2008年の秋以降、米国の大手金融機関の経営破綻等を契機に、就職環境は大きく変化しました。2008年10～12月期のGDP（国内総生産）は、年率換算で12・7％減となり、今年1～3月期も大幅な改善は見込めず、2009年についても、景気後退の一段と厳しい局面を迎える公算が大きいと思います。

このような経済環境の中、4年生の就職活動は大変厳しいものとなっています。就職情報社の調査では、46・5％の企業が採用数を「減らす」「未定」「採用凍結」、その理由として「業績不振」により抑制する傾向が見られます。また、採用方針も「量よりも質を重視」する企業が91・3％、つまり優秀な学生だけを採用する、しかも無理して採用はしないという企業がほとんどです。ちなみにここで言う「優秀な学生」というのは、学力だけではなく明るさや素直さ等の人柄、コミュニケーション能力を基準として判断する企業が多くを占めます。いずれにしても、このような状況から4年生は厳しい就職活動を余儀なくされると考えてください。面接、書類作成等就職に関する質問や疑問等、何か困ったこと、分からないことがありましたら何でも構いませんので、いつでも学生サポートセンターまで相談に来てください。

3年生は近年採用活動が早期化し、3年生のうちに内定を獲得する学生が増える傾向にあります。このような状況を踏まえ、就職活動において最低限必要な知識等を習得するための支援活動としてキャリアサポートを5月から毎週行っています。年間約20回のガイダンスやSPI等の各種試験対策を行いますので、休むことなく参加してスムーズに就職活動に入れるよう準備をしておいてください。

今年3月に卒業した人は慣れない社会人生活を送っていることでしょう。このような経済状況の中、今年3月に卒業した本学学生の就職内定率は、3月31日現在96・2％と大健闘したのは、皆さんが積極的に活動を行った成果です。ところで多くの人は、今働いていると思います。「働く」ということは「にんべん」に「動く」と書きます。そう、人のために動くことが働くと言うことです。また、これは3月に卒業した学生に教えてもらったのですが、「働く」ことは「傍（はた）」を「楽（らく）」にすることだそうです。つまり、「自分が動いて周りの人を楽にする、喜ばれる」、これが働くという本当の意味かもしれませんね。

平成20年度就職内定率（3月31日現在）

区分	経営ネットワーク学科	システム情報学科	情報メディア学科	全体
卒業者数	52	84	140	276
就職希望者数	46	70	119	235
内定者数	45	66	115	226
内定率	97.8%	94.3%	96.6%	96.2%

GAKUSEI
SUPPORT
CENTER
NEWS

東京で大学説明会を実施

平成21年2月23日(月)東京中野サンプラザで北海道情報大学説明会を実施しました。

この説明会の目的は、首都圏に本社がある企業等に対し、本学の現状や教育内容の説明と学生からの発表等を通して本学が目指している教育研究の方向性やその内容を理解していただくことであります。

説明会は、松尾理事長の挨拶に始まり、嘉数学長から本学における大学改革や質の充実のための取組等について説明いたしました。

その後、特別講演として独立行政法人情報処理推進機構情報処理技術者試験センターの下出政樹様から「新しい情報処理技術者試験について」ご講演をいただきました。

引き続き、学生からの研究発表として、医療情報学科3年　濱田　朋理君及び情報メディア学科4年　齋藤　朋昭君から、それぞれ発表があり、続いて卒業生代表挨拶として、システム情報学科4年　市川　駿君及び通信教育部(名古屋教育センター)4年　佐藤　征樹君から、それぞれ挨拶がありました。

この大学説明会は、毎年開催されており、今回は13回目になります。

今回参加された企業は、210社、参加者数は283名で、盛会裡に所期の目的を達成することができました。

企業・病院説明会を実施

平成21年3月5日(木)京王プラザホテル札幌で、北海道情報大学主催　企業・病院説明会を行いました。説明会は合同説明会方式で、3年生が興味を持っている企業、病院のブースをまわり、概要や特徴、求人条件、採用日程等を伺うという形で実施しました。42社の企業、2病院が参加し、就職を希望する学生のほぼ全員が参加し、盛大に行われました。学生が早期に就職に対する意識を持ち、積極的に活動を行い、夏休み前を目標に内定、そして就職を決めることを期待します。

平成20年度 北海道情報大学大学院経営情報学研究科 経営情報学専攻（修士課程）学生の学会発表について

::第5回観光情報学会全国大会（旭川）				
5/28	須藤　一弘	情報処理	1年	「風評被害の早期回復に向けたメディア情報転換期に基づくアプローチ方法の研究」
::電子情報通信学会他／第7回情報科学技術フォーラム（神奈川）				
9/2	井上　喬視	ネットワーク技術	1年	「トラフィック特性を利用したネットワークフォレンジックシステム向け高速圧縮手法の提案」
9/2	須藤　一弘	情報処理	1年	「風評被害対策に向けた話題分析に関する基礎研究」
9/3	篠田　智治	ネットワーク技術	2年	「ALMにおける高速再接続のための親ノード探索法の提案と評価」
9/3	柴田　英寛	ネットワーク技術	2年	「ネットワーク管理・運用のための音楽表現を用いた監視システムの提案とその有効性に関する評価・検証」
9/4	吉崎　順太	ネットワーク技術	1年	「PureJavaアプリケーションにおける遠隔イベント通知のための汎用機構の提案」
::教育システム情報学会／第33回全国大会（熊本）				
9/5	何　嵩昊	メディア制作論	2年	「新しい協調学習環境における学習ポートフォリオ評価方式について」
::情報処理北海道シンポジウム2008（稚内）				
9/19	松﨑　敦司	メディア制作論	2年	「自己カリキュラム計画支援のためのインターフェースの提案」 研究奨励賞受賞
9/19	須藤　一弘	情報処理	1年	「地震発生時における災害関連情報の推移と被害特性の比較分析」 優秀ポスター賞受賞
9/19	石井　拓郎	メディア制作論	※	「Webデザインコンテスト支援サイトの開発ー学生支援機能の評価と改善ー」
::E-Learn 2008（World Conference on E-Learning in Corporate, Government, Healthcare, & Higher Education）（Las Vegas, Nevada, USA）				
11/19	何　嵩昊	メディア制作論	2年	Towards New Collaborative e-Learning and Learning Community Using Portfolio Assessment
::映像情報メディア学会／2008年冬季大会（東京）				
12/9	石井　真人	メディア制作論	2年	「モーションキャプチャを用いたPinP Webコンテンツ制作」
::教育システム情報学会／2009年春　JSiSE　学生研究発表会（千歳市）				
2/6	何　嵩昊	メディア制作論	2年	「協調学習と形成的評価に基づく協調eラーニングシステムの実現について」
::情報処理学会／第71回全国大会（滋賀）				
3/10	何　嵩昊	メディア制作論	2年	「協力・協調活動と形成的評価を利用するeラーニング環境の実現」
3/12	須藤　一弘	情報処理	1年	「地震災害関連情報の分析に基づく風評被害対策に関する考察」
::電子情報通信学会／2009総合大会（松山）				
3/17	石井　拓郎	メディア制作論	※	「Webデザインコンテスト支援サイトの実践利用と評価」
3/18	篠田　智治	ネットワーク技術	2年	「ALMにおけるオーバーレイネットワーク構造把握手法の提案」
3/18	松﨑　敦司	メディア制作論	2年	「キャリアプランを考慮したカリキュラムの可視化ー大学生向けの履修計画支援システムー」
3/18	須藤　一弘	情報処理	1年	「テキストマイニングに基づく災害関連情報の話題遷移分析」
3/19	吉崎　順太	ネットワーク技術	1年	「既存WebサービスのComet化のためのプロキシサーバの提案」
3/20	井上　喬視	ネットワーク技術	1年	「特定フローのみ伸長可能なトラフィックデータ圧縮手法の提案」

※大学院特別科目等履修生：本学の学部4年次に在学しながら、大学院の授業を受講できる制度です。

平成20年度 北海道情報大学 公開講座終了報告

No.	講座名	回数	参加費	参加人数	備考
1	哲学と文学における人間本性論	1	無料	一般 29	
2	株式投資戦略　春コース	4	無料	一般 42	
3	Linuxサーバー管理者養成～UNIX文化の継承～	4	6,000円	一般 0	講座取り止め
4	体験!デジタルビデオ編集	8	無料	一般 16	
5	非嫡出子の相続分に関する議論	1	無料	一般 14	
6	健康シリーズ高齢社会と医療第1回肥満・糖尿病の治療と予防（Ⅰ）	1	無料	一般 23	
7	地域学講座「ふるさと江別の歴史と文化・再発見」	4	無料	一般 83	
8	eービジネス閑話（1）	1	無料	一般 24	
9	初めてのデジタルカメラ　春コース	1	無料	一般 22	
10	マーケティングを学ぼう（1）	1	無料	一般 16	
11	フォトショップ始めの一歩　入門編	3	無料	一般 27	
12	eービジネス閑話（2）	1	無料	一般 23	
13	コンピュータで暑中見舞いを作ろう	2	無料	一般 19	
14	マーケティングを学ぼう（2）	1	無料	一般 15	
15	健康シリーズ高齢社会と医療第2回肥満・糖尿病の治療と予防(Ⅱ)	1	無料	一般 28	
16	Excel初級講座	3	無料	一般 36	
17	データベースの基礎	2	無料	一般 26	
18	夏休み自由研究教室　君も映画監督～体験ビデオ編集～	3	無料	小学生 8	
19	夏休み自由研究教室～ロボットで理科を学ぼう～	1	無料	小学生とその保護者 30	親子13組
20	会社のホームページを見直そう!	2	無料	一般 18	
21	ゆっくりのんびりWORDに挑戦	5	無料	一般 36	
22	プログラミング入門～JavaScriptを通して～	3	無料	一般 0	講座取り止め
23	初めてのデジタルカメラ　秋コース	1	無料	一般 25	
24	健康シリーズ高齢社会と医療第3回高齢者と地域医療（Ⅰ）	1	無料	一般 27	
25	脱初級!Word&Excel～使える機能の紹介～	2	1,000円	一般 28	
26	楽しい初級中国語会話	9	無料	一般 25	
27	eービジネス閑話（3）	1	無料	一般 20	
28	レベルアップ!フォトショップ中級編	3	1,500円	一般 24	
29	株式投資戦略　秋コース	4	無料	一般 40	
30	ポータルサイトクリエータ育成講座	3	無料	高校生と一般 6	
31	マーケティングを学ぼう（3）	1	無料	一般 16	
32	中級者向け　ひとつ上をいくHome Pageの作り方 ～XHTMLとCSS～	4	2,000円	一般 21	
33	eービジネス閑話（4）	1	無料	一般 18	
34	マーケティングを学ぼう（4）	1	無料	一般 14	
35	スポーツの科学と実践	1	無料	一般 37	
36	健康シリーズ高齢社会と医療第4回高齢者と地域医療（Ⅱ）	1	無料	一般 31	
37	コンピュータで年賀状を作ろう　Aコース	2	無料	一般 20	
38	コンピュータで年賀状を作ろう　Bコース	2	無料	一般 39	
39	コンピュータで年賀状を作ろう　Cコース	2	無料	一般 18	
40	タバコと疾病	1	無料	一般 29	
41	健康シリーズ高齢社会と医療第5回医療制度と介護制度	1	無料	一般 40	
42	数学を楽しく	2	無料	一般 36	
43	ギリシャ数学概説	1	無料	一般 27	
	合　計			1,076	

大学主要行事 EVENT HIU

教職員の動向

■ 教員

(3月31日付) 退職 教授 玉山 和夫(先端経営学科)
退職 教授 外山 清高(医療情報学科)
退職 講師 佐野 秀行(システム情報学科)
退職 特任教授 井野 智(情報メディア学科)
定年退職 教授 加納 邦光(医療情報学科)
※4月1日付特任教授就任予定
定年退職 教授 山口 忠(情報メディア学科)

■ 職員

(3月1日付) 配置換 法人本部経理課経理課長 東 英俊
(北海道情報専門学校)
配置換 法人本部付係長 吉村 美穂
(通信教育部事務部庶務係長)
勤務 北海道情報専門学校 吉村 美穂
(法人本部付係長)
配置換 通信教育部事務部庶務係長 古川 啓子
(学生サポートセンター事務室係長)
配置換 学生サポートセンター事務室 谷口 朝子
(総務課企画交流係)

主要行事 (12月21日～3月31日)

■ 法人本部

2月 5日(木) 労使協議会
19日(木) 評議員会・理事会
3月 2日(月)～4日(水) 監査法人トーマツ「平成20年度期末監査」
26日(水) 評議員会・理事会

■ 大学

12月 26日 全学教授会
仕事納め
1月 5日 仕事始め
16日 経営情報学部教授会
17日～18日 大学入試センター試験
20日 後期授業終了
21日～29日 後期定期試験
23日 情報メディア学部教授会
30日 全学教授会
2月 2日～3日 一般1期入学試験
6日 高大連携調印式(釧路明輝高校)
13日 経営情報学部教授会
20日 情報メディア学部教授会
カリキュラム・アドバイザリーボード会議
27日 全学教授会
3月 2日 臨時経営情報学部教授会
臨時情報メディア学部教授会
3日 卒業者・修了者発表
6日 教育GPフォーラム
10日 編入学試験
経営情報学部教授会
情報メディア学部教授会
13日 学位記授与式
18日 一般2期入学試験
27日 全学教授会

■ 大学院

12月 24日 研究科委員会
1月 30日 修士論文及び特定課題研究 公開発表会
2月 6日 研究科委員会
14日 大学院入学者選抜試験(2次募集)
25日 研究科委員会
3月 12日 修士論文及び特定課題研究 事前審査(再)

広報活動

■ 進学相談会

1月;北海道 5会場(大樹、根室、中標津、稚内、枝幸)
2月;北海道 4会場(網走、紋別、浦河、静内)
東京都 1会場(蒲田)
神奈川県 1会場(横浜)
3月;北海道 5会場(室蘭、釧路、帯広、新札幌、苫小牧)
埼玉県 1会場(入間)
東京都 2会場(あきる野、立川)

■ 高校内ガイダンス

1月;北海道 2校(北広島西高校、常呂高校)
2月;北海道 3校(旭川明成高校、札幌龍谷学園高校、旭川竜谷高校)
3月;北海道 7校(駒沢大学附属岩見沢高校、石狩翔陽高校、札幌新陽高校、名寄光凌高校、富良野高校、富川高校、津別高校)
千葉県 1校(敬愛学園高校)
神奈川県1校(立花学園高校)

■ 高校訪問

12月;北海道36校
1月;茨城県2校、群馬県1校、埼玉県4校、千葉県4校、東京都7校、神奈川県3校
2月;北海道133校、東京都2校、神奈川県3校
3月;北海道139校、埼玉県1校、東京都6校、神奈川県1校

■ 入試説明会

1月 9日(金) 本学
2月25日(水) 本学
2月26日(木) 本学

■ オープンキャンパス

3月22日(日) 本学

■ 広報室来学者

2月 6日(金) 釧路明輝高校(高大連携調印式:学校長、教員1名)
3月12日(木) 遠別農業高校(教員1名)

VOL.45

編集後記

北海道情報大学も創立20周年を迎えます。成人した本学の姿を紙面から読んでいただければ幸いです。本年度に入って、43号・44号と表紙のデザインとレイアウトを変えましたが、今回学内報45号をお届けします。特に前号からは、読み易さを考えて基本的に縦組みに変更しました。その結果はどうでしょうか。今後もより親しみやすいものを目指していきますので、忌憚のないご意見をお寄せ下さい。(立花)